



女
俺を
にしたらっ!

マ
ン
ド
レ
シ
姉
貴
が

「やっと気づいてくれたのね。
間違いを犯す前に良かったわ」





「この窓を開けなさい。
その女は誰？
アタシの知らない女は、
部屋にあげちやダメよ」

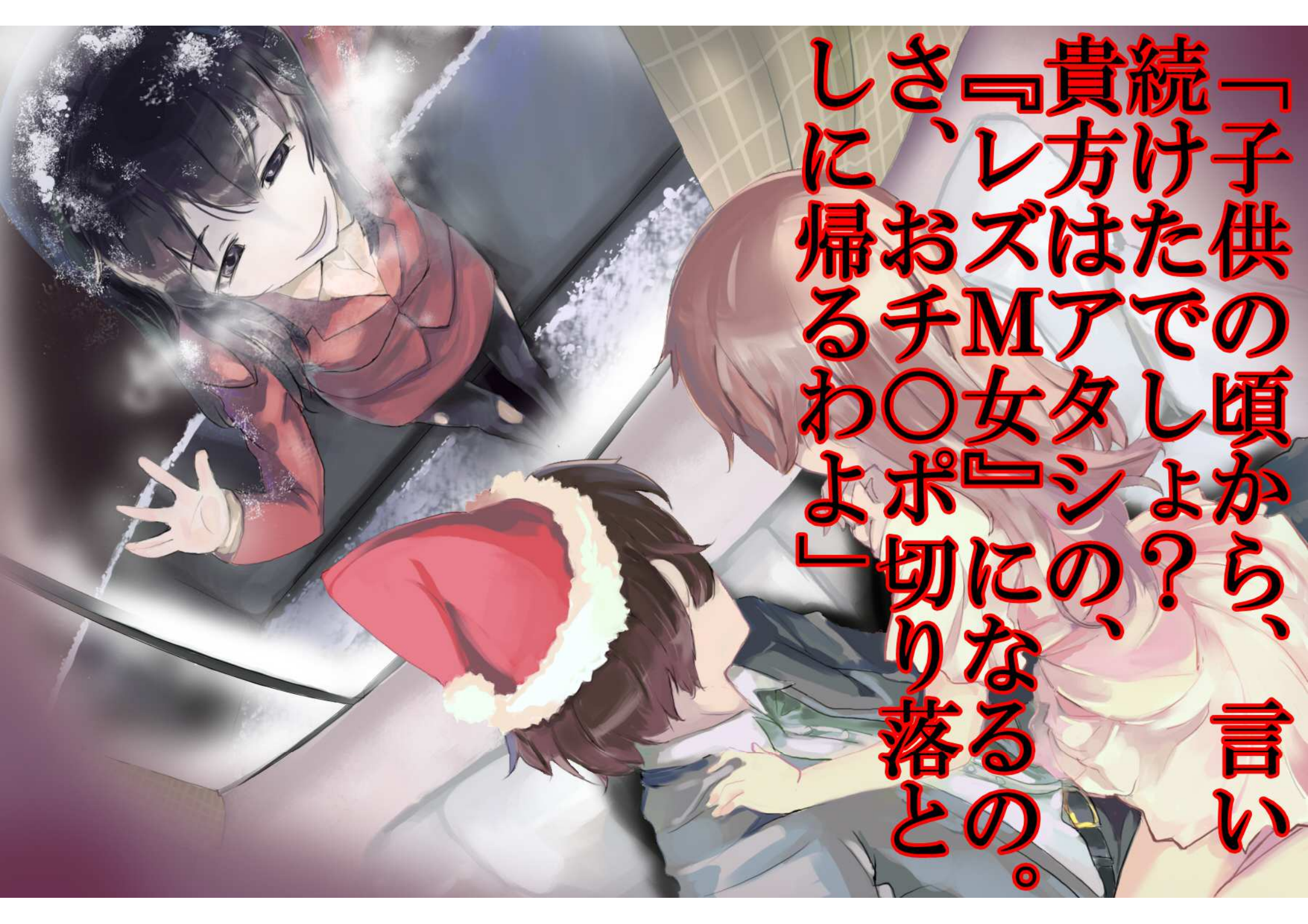
「クリスマスだから、
迎えに来たのよ？
言っただでしょ？
一番愛してるのは、
アタシだつて」

に
く



「さ、家に帰りましょ。
もう男の子の時間は、
……オシマイよ。
これからは『レズM女』
として、生きるのよ」





「子供達の頃から、
続けたのでしょ？
貴方はあたしの、
「レズM女」になるの。
さ、おち○ポ切り落と
しに帰るわよ」

言い

せっかく連れ込んだ
彼女は一瞬飛び出すように
逃げた。逃げた。

そして姉貴は、俺の
寮部屋に入ってきてきた。
薬物で眠らされた俺は
気がついた。俺は

女に性転換

させられ、実家の

地下室に監禁

されていた。

「良かったね。その巨乳。今日から女の子になれようように、1から教育してあげる」



「まずは、此処での
ルールを覚えてね。
可愛いレズM女になる
ための条件だから♪」



『お姉様との約束。 10か条。』

○ 中出しを受け入れます。

○ お姉様が退屈する場合、
私は女のカラダと心で
お姉様を楽しませます。

○ 私はお姉様の愛液を
捨てたりしません。
金で大切に
飲ませていただきます。

○ お姉様のおチ○ポ・オマ○コ
を崇拜いたします。

○ お姉様の御手を
煩わせることは致しません。
自ら進んでご奉仕いたします。

○ お姉様に”ノー”は絶対に口にいたしません。

○ 最後に必ずお姉様に対して御礼を口に致します。

○ 奴隷としてお仕え出来る喜びを態度でお示しいたします。

○ どのようなに私の女体をご使用いたただいても、全て受け入れます。

○ お姉様に値する、素直な良い女子でいます』

「守れなかつた時は、
こんな風に、
お尻ペンだよ。
ビシバシするからね！」



「とりあえず、今日は
お尻ペンペン百回ね。
お尻叩いてもらったら、
御礼を言いなさい。
いいわね？」







「今日はこのでオシマイよ。
御礼を言いなさい。
『お姉様、お尻叩き……
有難う御座います』よ」



御礼なんて。。。、
言えるはずなかつた。

レズでもMI女でもない
俺が、姉貴を
『お姉様』だなんて
呼べるはずもない。

何も言えない俺に、
姉貴は、

更なる罰

を与えた。